
watch!

夏川優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

watch!

【Nコード】

N5871Z

【作者名】

夏川優希

【あらすじ】

妹に彼氏が出来た！

俺はものすごくあせる。いや、シスコンとかじゃなくて。

純粹に心配なんだ、妹の彼氏の命が。

1話 発表

「お兄ちゃん！私、彼氏できたんだ。」

妹は紅茶の入ったカップ片手に笑顔で俺に残酷な言葉を発した。

俺は血の気が引いていくのを感じた。

「そ……それ……じ、冗談だよな……？」

俺は食べかけのビスケット片手に、無理やり笑って見せた。引きつってるのが自分でも分かる。

「今日はエイプリルフルじゃないよ、お兄ちゃん！」
笑ってる。でも俺の笑いとは正反対のまばゆいばかりの笑顔だ。

「い、いや……そういう事じゃなくて……。」

「もう！シスコンも大概にしてよね！」

怒らせてしまったようだ。妹は座っていたソファから勢い良く立ち上がると、ポニーテールを揺らしながらリビングから飛び出しているってしまった。

妹の飲みかけの紅茶だけが残った。

「本当に……そういう事じゃないんだよ……。」

持っていたビスケットが手をすり抜け床に落ちてゆく。

砕けたビスケットを眺めながら途方にくれた。

そう、俺はシスコンじゃない……と思う。

純粹に心配なのだ。

妹の方じゃない。妹の彼氏の命が。

1話 発表（後書き）

初めて書いた小説ですので拙いところが多々あると思います。
厳しい批判や、誤字脱字など何かありましたら是非ご指摘下さい。
感想等もいただけると嬉しいです。

2話 懇願

「おい、頼むよ田中！お前人脈広いしさ」

俺は頭を深々と下げてお願いしている。なのに田中は一向に首を縦に振らない！

そして田中は俺に目もくれずに鏡を見ながら前髪のV字バンクを整えながら言う。

「嫌だ。何で俺がお前のシスコンに付き合わなきゃいけないわけ？」

田中は『面倒くさいです。お帰り下さい。』といわんばかりの顔をしている。

「シスコンとかじゃないんだって本当に！これは人の命を守るためであってだな」

田中は即座に反論してくる。

「なんで妹の彼氏を探るのが人命の話になるんだよ。」

「そ……それはだな、色々と事情が……」

田中はさげすんだような目で俺を見た。周りの人間の視線も痛い……。

「とにかく、これ以上凜ちゃんに干渉しないでやれよ。俺は凜ちゃんの味方だからお前に協力はできない！」

俺はトボトボと屋上に向かった。屋上に行くまでの暗く、じめじめした廊下の空気が俺の「がっかり感」をさらにあおってくる。

「おお！圭介、どうだった？」

見覚えのある癖毛の友人を発見すると、俺は少し安心して顔がほころんだ。さらなる安心を求め、友人の下へ走った。

「全滅。凜のヤツ田中にも根回ししてた。」

俺はフェンスにもたれ掛かって伸びをした。そしておもむろに双眼鏡をカバンから取り出し、凜のいる教室の方を見る。カーテンが閉まっているため、凜の姿は見えなかった。

海斗はごろんと横になって笑った。

「ハハハ。やっぱりか。凜ちゃん相変わらず抜け目ないねえ。」

俺は凜の正体を知っている数少ないこの幼馴染にも情報収集を手伝ってもらっていたのだ。

「海斗の方もダメだった？」

海斗は困ったように頭をかいた。

「うん。色んな人にあたってみたけど、みんな『知らない』か『教えない』のどっちかでさあ。」

俺達は2人揃ってため息をついた。

「そうか……。弱ったな。どうしたもんか。みんな俺をシスコン認定するしさ。」

俺はフェンスにもたれ掛かったままズルズルと足を滑らせて最終的に座り込んだ。

空が青い。汗で湿ったシャツに風があたって涼しい。

心地よさで俺はほぼ元氣を取り戻した。

「それは仕方ないよ。圭介、普段から凜ちゃんのこと監視しすぎなんだもん。昼休みに双眼鏡で妹の教室のぞく兄貴なんか普通いねえよ。」

海斗は困ったように笑う。

「だって中学の時あんなことがあったんだぜ？もう心配で心配で。あのときのことを思い出して、俺は鳥肌が立つのを感じた。」

「気持ちちは分かるけどね。とりあえず弁当食おうぜ！聞き込みに走り回ったから腹減った。」

俺達はその言葉を合図に弁当を広げた。

「このままじゃ中学の時の惨劇が繰り返されてしまう。なんとか凛の彼氏とコンタクトを取らなくてはいけない。」

俺は卵焼きを口にはお張りながら力強く演説する。

「まあ、それには賛成。彼氏が誰なのかわからないと対策の仕様が無いからね。それに、あの惨劇は出来ればもう見たくない。」
海斗はパンをかじりながら苦笑いした。

「でも、向こうも色々策を巡らせている様だ。人に聞いてもムダなら自分達の足で探すしかないよ。」

海斗はニヤツと笑う。

俺もニヤツと笑った。

「よし、尾行するか！」

3話 尾行

「……尾行ってなんだかワクワクするな。」

俺は小声で、しかし興奮気味に呟いた。

「ああ、小学生の頃2人で巨乳のお姉さんの後をつけて家突き止めたこと思い出すな。」

海斗もニヤニヤしながら小声で話す。その声はテンションの高さを物語った。

俺達は凜から30メートルほど離れたところから凜の様子を伺う。

「しかし、本当に凜ちゃん彼氏と会うのか？」

海斗はちよつと顔をしかめた。

「凜が彼氏と会わない日なんて存在しないさ。中学の時だって毎日毎日毎日彼氏に会いに行ってたんだぜ？彼氏が友達と遊びに行く時だって無理矢理付いていったし、どうしても会えない日でも彼氏の家にはりついて監視したりさ……」

俺はまるで怪談話でもするような言い方をした。この恐怖を海斗にも分かってもらおうとしたのだ。

「え？そんな事までしてたのか。恐ろしいな。」

海斗は恐怖を感じ取ってくれたようだ。俺は満足して少し得意げに笑った。

「ああ。まさに恐怖だっただろうな。あ！道曲がる。追うぞ！」

俺達は見失わないように走った。

角を勢い良く飛び出すと何かがみぞおちに当り俺はそのまま倒れこんでしまった。

俺はしばらく何が起きたのか分からず地面に突っ伏していた。

下からうめき声が聞こえる。

あれ？ 転んだ割にはどこも痛くないな……

「おい、圭介！ はやく起きてやれ、窒息しちまうだろ！」

海斗の言葉でようやく「みぞおちに当たった何か」と「俺の下でうめいている何か」が人だという事に気付いた。

俺は急いで立ち上がった。

「わっ！ ごめんごめん、大丈夫ですか？」

俺の下にいたのはふんわりしたボブヘアの小柄な女の子だった。あんなだけ派手にぶつかったのに、女の子に大きな怪我はないようだ。女の子が背負っていた身長に不釣り合いな大きなリュックがクツションとなり、頭や背中を守ってくれたらしい。

ぶつかった相手に手を差し伸べる。あれ？ 同じ学校の制服だ。それに、この顔どっかで……？

「わあ、飯島さんじゃないか。どうしたのさ、こんなところで？」

海斗がいち早くこの女の子の正体に気が付いた。

ああそうだ、思い出した。隣のクラスの飯島さんだ。あんまり話したこと無かったから気が付かなかった。

飯島さんはためらいがちに俺の手を取って立ち上がった。

「いや、ちょっと散歩に……岡田君と松島君こそ。そんなに急いでどうしたの？」

飯島さんは服についた砂を払いながらギリギリ聞き取れるくらいの小さい声で話す。

俺達は顔を見合わせた。

最初に海斗が口を開く。

「いや、ちょっと最近体力落ちてたから走り込みをね！」

その言い訳はちょっと苦しくないか？ でもここは合わせるしか……

「そ、そうそう！ ついでにどっちが速いか競争しててさ。それでぶつかっちゃったんだ。ごめんね！」

「そうだ、怪我とかない？大丈夫だった？結構派手に転んでたからさ。」

海斗が話をすりかえた！良くやった海斗！

「うん、とりあえず大丈夫そう。それじゃあまた明日ね。走りこみ、頑張つて。」

飯島さんは足早に去っていく。

ああ、妹の姿はどこにも見当たらない。

「ダメだったな。」

俺はため息混じりに呟いた。

「まあ凜ちゃんの事だ。そんなに簡単に探し出せるわけ無いだろ。気長にやろうぜ。」

しかし、そんなに悠長にしている時間はないようだ……。

凜の行動がおかしくなっているような気がする。

携帯をいじる頻度も増えてきたようだ。

凜は彼女からメールの返事が来なくなると、心配になってそれまでの2倍のメールを送りつけてしまらしい。1通返事しないことに2倍。考えただけで恐ろしい。

まあメールの返信をちゃんとすれば問題ないのだが……つい、忘れてしまうこともあるだろう。

中学の時は最終的に3分に1回程度メールを送りつけていたそうだが、彼女には悪いが、凜の体力と執念に感心してしまった。

最近、部屋にこもってばかりだし……心配だ。

何をやっているのだろう……。

4話 暗闇

「おい、凜？ご飯できたから呼んで来いって母さんが……。」

凜は電気もつけずにパソコンの画面を見つめている。

「今日はご飯いいわ。」

凜は無機質なパソコンの光に照らされて怪しげな雰囲気を感じてい
る。

「ご飯いいって……外で食べてきたのか？」

俺は凜の部屋に足を踏み入れる。するとようやく凜の部屋がいつも
と違うことに気が付いた。

「おい……なんでこんなにたくさんゴミがあるんだよ？」

凜の部屋の片隅にゴミ袋が5つもあった。凜はゴミを溜め込むタイ
プではない。俺は血の気が引いていくのを感じた。

「お兄ちゃんには……関係のないことよ……。触らないで！」

俺は伸ばしかけた手を引っ込めた。凜は凄く怖い顔をしている。俺
が手を引っ込めたのを確認すると、凜は視線をパソコンの画面に移
した。

「大丈夫よ……。ちゃんと仕分けたら自分でゴミ置き場に捨ててお
くから。」

俺は凜の部屋の異質な空気に耐えられなくなり、出て行くことにし
た。これ以上ここにいるのも何も得しない。

俺は去り際にパソコンの画面をチラリと見た。凜はグーグルアース
でいろいろな角度から誰かの家を見ている。俺の知らない家だが……
まさか、彼氏の家か？

「ああ、そうだお兄ちゃん。シスコンも大概にしてって私言ったよ
ね？」

俺は足を止めて振り返る。冷や汗が止まらない。

「な、何のこと？別に俺なにも……」

凜がこちらをにらみつける。

「とぼけないでよ！次私を尾行したら許さないから！」

あまりにも大きな声を出したので俺は驚いて声が出なくなった。

「もう用が済んだら出て行って。早く！」

俺は急いで凜の部屋のドアを閉め、走って凜の部屋から遠ざかった。尾行は大失敗だったようだ。凜を怒らせてしまった。

それにしても……あの大量のゴミ、あれはきっと彼氏の家の……。

俺は恐くなって考えるのをやめた。

5話 焦燥

「海斗！俺はどうしたら良いんだああああ」

この秋晴れの空の下、圭介だけが嵐に遭ったように取り乱している。大方、彼氏の事無理矢理聞きだそうとして「お兄ちゃんなんか嫌い！」とか言われたんだろう。

「なんだよ。また凜ちゃんか？」

「そうなんだよ！尾行がバレちゃって、昨日から口きいてくれないんだよおおお！しかも、しつこく話しかけたらフライパンで頭殴られたんだよ！見てコレ！酷いと思わない？」

圭介が髪を掻き分けて頭を俺に突きつける。よく見ると確かにたんこぶが出来ていた。派手にやったなあ。

圭介は今にも泣き出しそうだ。たんこぶが痛いからというよりは凜ちゃんに口きいてもらえないのが辛いのだろう。いつも否定するけどこいつってやっぱりシスコンだな。

「後つけてたのバレてたのか……。」

圭介は相変わらず慌てている。

「海斗、どうしよう！凜が携帯をいじる頻度も増えてきたし、昨日部屋に彼氏の家のゴミがあるの発見しちゃったんだ！グーグルアースで彼氏の家見てたし、このままじゃマジで彼氏の事殺すかもしれないええ！」

圭介が涙目になってきた。本当にヘタレだなあ……。

「いやあ。まだ大丈夫だって、ちよつと落ち着け。」

取り乱す圭介をなだめながらドアの方を見やると、飯島さんが俺らの教室に入ってきた。

飯島さんは凄い剣幕でまっすぐこちらへ来る。昨日ぶつかったこと

怒ってるのか……？

彼女は俺達の前で止まると一瞬立ちすくんだが、意を決したように昨日の10倍以上の大きな声で話しかけてきた。

「け、圭介君！話したいことがあります！放課後、屋上に来てください！」

それだけ言っているとポカンとしている俺と圭介を置いて走って行ってしまった。

「な……なんだったんだ……」

圭介はまだ何が起こったのか分からないようだ。さっきまで飯島さんが立っていた空間を見つめながら呟いた。

「飯島さん、この前のことで怒ってんのかなあ……」

圭介はさっきよりもさらに落ち込んでいる。

「いいや、違うね。」

俺はニヤツと笑った。

あの発汗、顔の赤さ、声の大きさ、苗字呼びからいきなりの名前呼び、そして髪の設定の丁寧さ……

俺は落ち込む圭介を横目に呟いた。

「おもしろくなりそうだ！」

6話 杞憂

放課後、俺達は言われたとおり屋上へ向かっていた。

「怖いなあ。怒られないかなあ。」

俺は心底ビクビクしていた。

あんなに顔真っ赤にして「屋上へ来い」って……
怒ってるに決まっている！

なのに海斗はなんだか機嫌が良かった。鼻歌まで歌っている。

「なあ、もし怒られたら海斗も一緒に謝ってくれよ？ ジュースおごるからさあ。」

海斗は俺の顔を見るとニヤツとした。

「お前って本当鈍感だよな？」

……訳が分からない。

「はあ？ なんで今鈍感の話が出てくるんだよ？」

屋上へのドアを開けて周りを見回すと、飯島さんが柵に寄りかかって空を見ていた。

俺達が来たことに気づくと慌てて柵から背中を離して髪をささっと整えるところらへ向かって歩いてきた。

飯島さんは俺を見て微笑んだ。

「来てくれてありがとう。」

そして海斗を一瞥すると低い声でボソッと呟いた。

「……岡田君も来たんだ。」

「ああ、邪魔ならどっか行くけど。圭介がどうしても一緒に来てくれって言うからさ。」

海斗はニヤニヤを一生懸命我慢しているように見える。なんでこの状況で笑ってられるんだよ……。

「それで、話って何？」

海斗がさっそく話を進めてしまった！

ちよつと展開が速すぎるよ、心の準備がまだ……

「圭介君！昨日、凜ちゃんの後つけてたんでしょ！？」

俺も海斗も想定外の言葉にただ呆然とした。

俺は急いでそれを否定した。これ以上シスコン認定されるのはまっぴらだ！

「ち、違うよ？走り込みを……」

「ごまかさないで大丈夫だから！私、圭介君の味方よ！」

飯島さんは1歩こちらへ歩み寄ってきた。俺はちよつと怖くなって一歩後ずさる。

すると見かねた海斗が間に割って入ってくれた。

そして俺が言いたかった言葉を海斗が代わりに話す。

「どういうことかな？何か知っているの？」

飯島さんはにっこり笑った。……怖い。

「ええ。ゼーんぶ知ってるわ！中学の事件も、そして今現在の彼氏もね。」

昨日や今日の休み時間とは全く違うハキハキとした飯島さんに戸惑った。

飯島さんってもっと大人しくて、控えめな子だと思っていたんだけど……。どうやら、そんな感じじゃないようだ。

俺があっけに取られているのを尻目に海斗が問いたです。

「なんで中学の事を知っているのかはとりあえず置いておこう。そ

れで、今の彼氏って誰なの？」

「……今から私についてきてくれる？」

7話 足音

ただの告白だと思ったのに、なんでこんな事になってんだよ。

赤々と色づいた紅葉が風に揺れている。

そして、圭介は飯島と並んで歩きながらクレープを食べてる。周り
はカップルだらけだ。

俺は2人の後ろを1歩ほど間隔を空けてついていく。

……どう考えても俺だけ浮いてるよなあ。

飯島は凜ちゃんと凜ちゃんの彼氏がいそうな場所を巡っていると言
っているが……圭介とデートしたいだけじゃん。

俺は後ろから嬉しそうに笑っている飯島を観察しながら色々と思考
をめぐらせていた。

「屋上に呼び出したのは告白の為」という予想は外れたが、「圭介
のことが好き」というのは間違っていないかったようだ。まあ、良く
考えればほとんど面識も無いのに告白するというのは不自然だな。
それにしても、凜ちゃんの彼氏を知っているというのは本当だろう
か？デートのための嘘……にしてはやりすぎだし、「中学の事件」
を知っているのはごく限られた人物だけだ。きっと彼氏を知ってい
るというのは本当なのだろう。

では、何故こいつが凜ちゃんの彼氏を知っている？友人伝いに聞い
たのだろうか。

飯島はけして社交的な性格とは言いがたい。どちらかというと大人
しい、目立たない子だ。普段は。

だから屋上で饒舌に話し出したことや、今、圭介に積極的にアプロ
ーチしているのに驚いている。

これも「愛」の力だというのか？

凜ちゃんを見てきた俺としては、「愛」の力を否定は出来ない。

「おい、海斗？海斗？」

圭介の呼ぶ声で俺はハッと我に帰った。飯島がいない。

「飯島さんは？」

圭介は驚いた顔をして答える。

「トイレ行ってくるって言ってたじゃん。どうしたんだよボーっとして。」

俺はため息をついた。圭介……何も考えずにバカ正直に飯島のデートに付き合ってたのかよ。まあ圭介らしいけどな。

「色々考えてたんだよ。なんで飯島さんが凜ちゃんの彼氏知ってるのかとか。」

圭介はアホ面で手をたたく。

「あー！全然考えてなかった！そういえば、何で凜の彼氏の事してんのかな？」

……こいつ、やっぱりアホだ！俺はさらに大きなため息についてイライラをおさめようと努力した。

「まあ、このしょうもないデートに付き合ったりや最終的には答えに辿り着くんだろうさ。そうじゃなかったらとんだ時間の無駄だけどな。」

すると背後から足音が聞こえた。飯島が帰ってきたか。

飯島の顔なんか別に見たくも無かったので俺は圭介がどんな顔をするのか気になり、圭介のほうを見た。

ニヤニヤしながら手を振っていたら足を踏んづけてやろうと思ったが、圭介はニヤニヤするどころか驚愕を顔に浮かべて直立不動のまま凍りついていた。それを見て何か異常事態が起こったとようやく気が付いた俺は後ろを振り返り飯島のほうを見る。

飯島の隣にいたのは……知らない男と手をつないだ凜ちゃんだった。

8話 彼氏

強い風が吹き、紅葉が舞う中、飯島さんと凜、そして見知らぬ男が並んで歩み寄ってくる。俺は一生懸命求めて、あれこれ詮索していた物が突如として目の前に現れたことに驚き、固まった。海斗の方を見ると同じように固まっていた。

飯島さんは無邪気に笑いながら手を振る。

「圭介君！連れてきたよ。」

凜は恥ずかしそうな顔をしてうつむいている。……手、つないでるし。

凜と手をつないでいる「彼氏」と思われる男は俺に向かってお辞儀をした。凜は、はにかみながらこの男の紹介を始めた。

「お兄ちゃん、こちらが私の彼氏の飯島悠斗君よ。」

彼氏？このくらそーなヤツが？俺の苛立ちに比例するように風が強くなっていく。その風に乗って凜の頭についた紅葉をあつ男が取った。そして凜はまた嬉しそうに微笑んだ。ますます腹が立つ。

凜の「彼氏」は、背は俺より高いが薄っぺらい感じでなんだか弱そうだ。とても凜の暴走を止められるとは思えない。

俺が嫌味の1つでもかましてやろうと思ったその時、凜の一言で何を言おうとしたのか忘れてしまった。

「もう！お姉さんの頼みじゃなかったら絶対紹介なんかしなかったのに。お兄ちゃん、悠斗に変なこと言わないでよ？」

ん？お姉さんなんてどこにいるんだ？あれ？飯島って……

俺は訳が分からなくなくなって凜の彼氏を凝視した。

飯島さんは風で乱れた髪を手ぐしでセットしながら微笑んだ。

「悠斗はね、私の弟なのよ。姉弟共々仲良くしてね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5871z/>

watch!

2011年12月24日00時59分発行